



中村俊定文庫  
文庫 18  
375



卷之十

女海山

完



序



去り秋の夜は御も葉の金葉を  
 ぬく莫逢の羽衣すれぬわさ或月ハ  
 梅かきくま言程客は夕日を物と何の  
 目と踏く瑞葉の影をわさくた  
 こゆゆの秋風近う秋の露ふあぬ  
 縄さく純よひうあさぬりうくれや  
 餘さるる文海きくも有海の紅花

序

籠と思ひぬきまのけしきもあはれ  
うゝ顔の福志成僧一侍りされを  
風物乃たまむすく小篇思ひまよしの  
とく師使を世の母は杖を曳て  
まゝく五条河原より夕影をうた  
額あひら比ひと杖字活の河原より  
道達しと昔具の銭且銀の毒  
得しと杖と杖は世人の根骨三と

弦ひゆる一巻おのの曲をよみし  
そは梓弓の油はらおろしあはれ  
せしうゝくくくはる半阿りてあはれ  
此空玉弦白果よりくくくあはれ  
ないしうゝくくく一巻巻の音仙  
なうゝくくくはあはれ例の田舎乃  
まねちうゝと合てまゝあはれ  
先をぬくまゝあはれ  
序

附録一 ありて敷もなき一 次必やるを  
源の袖より袖を徘徊の身乃西日  
来下一 駿府城南探守其處於雁成  
後の松を雪中菴のあつ下りて  
筆と玉川のの水よそへて雨云

空齋十度辰林陸



夢見賦

雪中菴

五月十二日大和の古山やまへ洛此旅を  
とりの難波津よ趣くささのりて伏見此  
茶店より不嗽茶梅乃二子よお取  
おこりよおれりて中宿はれ夢見人と  
杖を曰く一寸此日を降りしらす此  
為星よ日ひきこきされと茶梅法師の  
志多のこころ路傍感ある一 夢てかの

紫為揚るる霞舟とすくく求く  
漕舟より二人凡れ乃客とたり  
木の端に法師あまをゆくとわづら  
赤魚もたぐりて斗酒たぐりて  
婦も那くさるを何某と生乃情を  
小舟より舟繩結とく舟より舟  
夕霧と霞をまて東坡の赤磬乃  
抱ひと明り方丈も郭中と高きり

笑よて中流は深よる日此返照を  
も根より結て流るる旭山乃夕を  
舟くく一舟の郭とて赤磬の  
嶽より流るる生燈一首此詠とる  
橋を結し秋の水は中の有破とて  
先思ひ出る源来乃そくく  
心より直心後あり左に草字後あり  
船より直心後あり左に草字後あり

墨画よりゆふ雪八幡山ハ設色ハ  
翠山水含清暉清暉能娛令  
いつの謝靈運、湖中のワタシ  
かた下あつ——とくすの宵は目を  
波は志の月又あつられも月  
白れ雲よから批書をして周り  
あり波は玉の光を包める  
——墨をまなれるとまなれて

南よみされ東西ハむく或ハ管よ  
降杖子ハ細く落るその氷は  
山の瀬は春とつ——極り枝り  
吹きそハ掃娘はおひはむせぬ  
珠や交れ雪も古戰場の高執を  
あつりと云侍は実あつ——おの嵐  
水の音も懸波は喚りおもひ  
あして只よその清よあつ地そ





一卷提夜

夢多太

川風也す 世に喜を必り  
 系ふ子入 中長ふ交山の月 浪玉中 落梅  
 流竹のまら 淋し引去りて 旅人  
 とりめの 嘆し 嘆此返る 菊意  
 寂と 尊し ても師を此物居る 洞里  
 釣 新 焼 乃 四角 八房 波 埜

ウ

時て 流る 光と とき 柳さし 不 嗽  
 爰乃 妹の 髪より 異成 太  
 色付 時星と くらき 柳 船 梅  
 焼 籠の 子母乃 中 白の 神 人  
 白石へ 望つて 他女 亭より 垂 垂  
 秋乃 あそ くれを 井 ぬ人 玉 里  
 弥 舖の ぬ 葉の みる 月 燈 埜  
 碓と ち ぬ 小 菰 あち ち 嗽

五  
 るものの裸はうら刺きしり  
 蟬とくして喰ひ苦多切ちぬ  
 世とむよ戸さぬ扉の目も  
 真さを月うら麻も持しん  
 天文の骨より片葉も柳向く  
 思ふぬ袖も熱ぬおとろく  
 形どとて毛深きれ遠ゆり  
 節乃一初と風のひと取も  
 太里埜人嗽梅

梅  
 按摩とり節かき進てかきあり  
 本懐きつこの毒れ下陰  
 聖六葉成化やまの節およ  
 暖本ささあさささほく  
 強りせきし中ノ節節の毒うく  
 室乃節中風をあひ若  
 月らの毛も袋より入るも  
 笑ひ踊りよよつらぬり  
 梅太里埜人嗽梅

目よんぬあはれ草の門送  
 ひと山心り保元乃富  
 空は心まのそとまをま  
 い〜入〜新秋忘のゆ〜  
 空が〜る〜れ〜鼻り腫じ  
 此〜心〜い〜の妻乃ああ不此

梅 里 城 嗽 人 空

一卷越登

都雁

下言ふても登り初る新作  
 空の抄も日傘大名未定風前  
 狐袋ぬき色一人口利く 蕨太  
 後乃時斗り新時斗り 吐月  
 空ぬけ方を空おろ〜月見形 物雲  
 橋を三す〜く〜乃 静 遠平

う  
初とく仲人のおきハ是をとり  
乞とたぬ乃日き路一  
横とつ虹くもまよ下の坊  
梅千つ時か〜こい足敷  
物くつろき〜あはれはは後  
夕ア習ふ〜持よと味乞  
き舟のそと上船る月の夜  
小歌歌乃憐き〜く〜  
雁 雁 大 月 雲 平 夫

=  
去とても解りぬ心望や徳  
物〜とまき〜あふ山  
吉櫓のまよ持きて 是迄船  
歌み〜つとまつ〜く〜む  
とら〜くを枕の〜ぬ産つて  
ひと〜内焼乃明〜き  
降〜を治〜のま〜  
楓〜釣〜の夜〜  
雁 雁 平 雲 月 太 府 雁

わら

楊子も及そ〜かきて極まり  
 破篋の版り連をり  
 明てりる時 争は又ふ破の雲  
 印の刻 百れより  
 松灯も袖よか〜の友きつね  
 少強の園結 母を無日也  
 後き〜もい月秋 妹た〜て  
 おふと屬も 雁丸も ねえふ〜る

舟 太 月 雲 平 雁 夫 新

ニウ

鞠年より家共ぬかひお〜と〜  
 壱多と〜宿起り下結は出女  
 鶯乃うりるさあ〜海風の  
 日和のき結 吹き揚ら  
 多程ふ〜る糸 ねえふ〜る  
 既〜〜奇仙も〜の夕雲

太 雲 雁 平 月 執筆

和

附録

宵時表子 同銭居て必りる	宜中
如のひて 早きとくも昔外	簾文
如くも 八代居て けし一筆の下	求光
如ておと 雲を又ぞとる昔外	眠我
葉根乃 みるくも ちる昔外	花明
如光の さらり物 ありりる	碧古
玉を 深き 独りつま 居く昔外	南羅

中巻

おろろ 子影をのり 昔外	梅
如一 以時を ありの 山路外	石嗽
昔外 如くも 世を 居て昔外	吏仙
如入く 如くも 直あり 心あり	吐月
如年の 月日 是之 宗く昔外	蚊牙
八掃 乃みるく 又く一 忍昔	雪因
灯を 居く 又く 八掃く昔外	花上

千金の歌乃扇てや必り必 六渡  
 埋弁は物あらうき春の風 春帳  
 川風を待たうきあはれらふ 眉山  
 必りらるる世史の秋を懐ふ 甚吹  
 切落乃扇をあらうきあはれらふ 吐雲  
 必りらるる世史の秋を懐ふ 野菊  
 るはゆるぬを教へるるれ 氣腹  
 必りらるる世史の秋を懐ふ 川

昔々や川曲りらるる胡弓 五全  
 扇て又石もなれぬ必りらる 如雷  
 卯の志は扇て水よ必りらる 鯉半  
 昔々や川曲りらるる胡弓 渡道  
 一と下月れは扇て必りらる 史軌  
 昔々や川曲りらるる胡弓 枝首  
 秋の情よさるるハ渡りてや必りらる 敬雨

375

+

水汲りや入て糸々草の乳  
 井をのほら昔乳牛の伸るの乳  
 一つうこ月あやうく昔草の糸  
 多必の昔草きくく指揮  
 下せよ昔必あやうく此川  
 必加ふ必あやうく此川  
 昔草也乃雲といきく一昔草  
 何く生和軒の昔草といきく

萩路  
 夢太  
 初雅  
 白牛  
 斑象  
 吏流  
 吏鏡  
 信史

似珠の丁子路や必の糸  
 昔草也乃雲といきく一昔草  
 是も又水と必の糸  
 其川や釘も昔草の糸  
 必あやうく又てハコ糸といきく  
 水も糸くく糸も糸あ糸糸  
 糸并り糸糸く糸糸糸糸  
 糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

暮且  
 桃鏡  
 泉鳴  
 鐘山  
 金危  
 し思  
 子來  
 琴馬

やう



水もあつちのまゝ	柳波
松明をわき焚て	山奴
連り岸の	眠江
かりく	六耳
野	推堂
水	蘭府
馬	馬老

夜ハ	旅人
秋	南窓
今	棧石
如	如凡
自	自來
旅	旅人
古	古山

誰はり候ふ

わら

大和

玉骨を月よりかきぬ風有り必若 迄平  
 紫舟の春く朽て昔の糸 中 麻又  
 子舟子及とあへぬつあゝも作 物雲  
 昔欠や必くよめる侍予 祝 風仙  
 二三尺人糸麻よきして昔の糸 京 花夕  
 和くつ比お異や水う必昔、 歩月  
 夏の灯とくもあゝ焼とあゝら片、 燈雀  
 石山乃雪とあゝれゝ昔の糸 栗津 文素

千細の毛下もあうそあうらふ系、可凡  
 三日月の影を春集く昔の糸 雪國樓堂 系歌

雪國の借を何のあふ葉工供してはゆと  
 吹そあゝくゆ風のり掃たはふれえよう  
 系と運ひて暗家を醒さくむとて陰凡  
 あぬせのこゝろをとりて系歌えんあまきり  
 此章よりあゝ風流あゝくもあゝくあゝぬ



